

追手門学院大学
上方文化笑学センター年報
第3号



2022年度

追手門学院大学 上方文化笑学センター

目 次

寄 稿

古典芸能・講談に魅せられて	大谷 邦郎	1
---------------------	-------	---

研究報告

笑いはスポーツ実施時に効果を及ぼすか？ —少年野球チームの指導者へのアンケート調査結果より—	辰本 頼弘	5
---	-------	---

活動報告

実演家講演会「講談の魅力」.....	広瀬 依子	7
松原公民館講座「時代を切り拓いた女性たち～女性芸能者の歴史と歩み」.....	広瀬 依子	11
2022 年度上方文化笑学センター活動記録		13
2022 年度上方文化笑学センター所員および研究員一覧		14
追手門学院大学上方文化笑学センター規程		

寄稿

古典芸能・講談に魅せられて

追手門学院大学上方文化笑学センター客員研究員 大谷 邦郎

さて、今から拙文を披露しようとするのは誰あらん。ただただ本人が「講談作家」と名乗るだけで、世間はそうは認めていないと言う、何とも厚かましい輩が、その人！大谷邦郎なのでございます。(小拍子木が鳴る音：カ～ン！)

長らく報道の現場でニュースを追い、事実を、事実のみを紹介すると言う仕事に携わって参りましたが、講談は似た部分もあるものの、決して事実だけを披露するものではございません。事実と虚構が、あっちで絡み合い、こっちで反駁し合う。ガッシ、ガッシとお互いが鏝通り合いを展開していく話芸が講談なのでございます。

さ～て、その講談の魅力も、この場をお借りいたしまして、少しだけ、ほんの一握りだけご紹介させていただくのでございます。

皆様、しばしお耳を、と言うか、お眼目をお貸しいただければ幸いでするう！

とまあ、講談師のような口調で冒頭部分を書き始めてみました。文字を追うだけで、身体が動き出しませんか？多分、日本人のDNAに組み込まれている“リズム”が、講談には刻まれているのだと思います。こうしたところが古典芸能の魅力。長い歴史の中で、不要なものは削られ、少しでも魅力がある部分は磨かれ、さらには昇華していったに違いありません。

そうした古典芸能の魅力を学生の皆さんにも知っていただきたいと、2022年の師走に、講談師の五代目・旭堂小南陵師匠とともにキャンパスを訪れ、小南陵師匠はもちろん珠玉のその芸を披露されたのですが、筆者は、その“前説”として、講談の歴史や、その魅力、筆者が何故講談を創作するに至ったかを少し語らせていただきました。

この拙文は、その授業の内容をテキスト化した部分が大半となりますが、講談をご存知ない方にも、その魅力を少しでも伝えることが出来ればと心より思っております。

さて、まずは講談のその歴史からご紹介しましょう。誕生は実に古く、戦国時代のお伽衆がその起源の一つではないかと言われています。戦国時代のお伽衆は、ご存じですか？室町時代の後半から江戸時代初期にかけて、将軍や大名の側近としてお仕えし、雑談に応じたり、自己の経験談を語ったり、書物の講釈などをしたと言われていました。例えば、曾呂利新左衛門。ユーモラスな頓知で人を笑わせる数々の逸話を残したことから落語家の始祖とも言われていますが、彼は豊臣秀吉に仕えた御伽衆の一人と言われています。落語家の始祖が、そこにいるのならば、講談師の始祖もいたことでしょう。

しかし、「いやいや講談師誕生の起源はもっと古い」と言う説もあります。それは、平安時代の僧による仏法の説話がそうだと言うのです。確かに節をつけながら行われる説話の形は今もありますので、その可能性だって十分にあるでしょう。

そんな講談が今のような大衆芸能として花開いたのは、江戸時代から明治にかけてのこと。各地に講釈場と呼ばれる講談専用の演芸場も設けられるようになりました。

ところで、皆さんは出版社の「講談社」はご存じですね？「少年マガジン」や「なかよし」、「ViVi」や「週刊現代」などを手掛ける出版社ですが、社名には「講談」の文字が。この出版社の設立は明治時代にまで遡るんですが、



講演中の筆者

当初は「講談の速記本」も手掛けていて、それが大ベストセラーに。そこから、今の社名になったと言われてい
ます。これだけでも当時いかに講談の人気が高かったかが分かります。

しかし、その後は、漫才や落語に次第次第にその人気が奪われていき、さらに昭和に入って、太平洋戦争で日本が
敗れGHQの支配下に置かれた際に「あまりに好戦的」と、講談は上演差し止めの憂き目を見るのです。もちろん講
談師の数も大幅に減り、関西では、講談師は二代目・旭堂南陵（1877年9月15日-1965年11月19日）たった一人
だけと言う時代もありました。

そうした長い不遇時代を経ながらもこの古典芸能は、何とか生き延びるのですが、今、この講談の魅力を見直そう
と言う動きが出ています。と言うのも、聞いて頭の中で物語を紡いでいくこうした話芸は「脳に良い」と言われ始め
たからです。さらに神田松之丞（現・六代目神田伯山）と言う新たなスターが講談界に誕生したことも大きな要因で
す。

そんな講談の魅力に囚われた一人が筆者なのですが、ただ観客席から見聞きするだけでなく、講談作家として新作
講談を何故手掛けるようになったのか、その理由は後ほど解き明かすとして、まずは、こちらをご覧ください。

お茶々は障子を開け放ち、大広間に駆けやってきた姿勢で、ピクリとも動かなくなった。

いわゆるフリーズした状態。

今ここで何が行われようとしていたのか？

秀吉が、信長公から今受け取らんとしていたものは果たして何なのか？

身体は固まったままにもかかわらず

大きな腫だけが、そこに、ズズッとズームイン

お茶々の顔の中で、そのズームアップされた映像が結ばれ、フォーカスがピタリと合った。

果たしてその物体は、漆に固められた黒光りする頭蓋骨。

さらに障子を開ける前に聞いた秀吉の声がオーバーラップしてまいります。

「殿！わたくしめが、その長政の腐れ首で、一献頂戴したく存じます」

これは、2007年に筆者が初めて旭堂小南陵師匠（当時は旭堂小二三）のために書いた新作講談です。題して「大坂城落城 外伝・うたかたの…」の中からの抜粋。

皆さんは「浅井長政の髑髏の盃」というお話をお聞きになったことはありますか？ 織田信長が義弟・浅井長政の頭蓋骨を加工して盃を作ったと言う逸話ですが、そのシーンを想定して書いたものが上記です。古典芸能ではありますが、当然、観客の方々に理解していただかないといけませんので、現代語で表現することは致し方ないとして、たった10行ほどに、いかにカタカナが多いか！ 「フリーズ」「ズームイン」「フォーカス」「オーバーラップ」と英語表現を意識的に盛り込みました。果たして観客の反応は？ これが、ウケちゃったんですね。ここが、古典芸能の懐の深さなんだなあ、と都合よく理解すると、この後も、何本も新作講談を手掛け、様々なイベントや講演会で披露していただきました。

しかし、筆者にとって講談を創作するという事に一番ハマった訳は、事実と確認されていないことも自由に書ける、という点だったかと思います。と言うのは、筆者は、元々はテレビ局の経済部記者。記者は事実を追い求め、事実のみを伝えることと言う教育と訓練を受けてきました。しかし、この講談はそうではありません。先ほどの創作講談であっても、秀吉が長政の頭蓋骨で出来た盃で酒を飲んだかどうかなど分からない。もし、事実として確定していても、必要な情報であれば「この宴会に出席していた有力武将に話を聞いたところ」と言ったコメントを足さねばなりません。もちろん、そんな武将に今さら話を聞くことなどは出来ませんが。ここが、実に痛快だったのです。語弊があるかも知れませんが、創作講談では「公然と嘘をつける」と言うことが、筆者にとっては非常に魅力と感じられる点だったに違いありません。

しかし、嘘をつくにしても、ただ嘘を並べている講談にはなりません。歴史の中の出来事と言う枠の中で、すなわち史実と言われるロープが張り巡らされているそのリングの中で、どう嘘をついていくか、と言う“規制”と“自由”の境界線をひょいひょいと飛び越えていくところに面白さを感じたのだと思います。

これは、そのまま講談の魅力と言ってもよいかと思います。江戸時代や明治時代など、今と比べればその情報の真偽を確かめることなど、ほぼ不可能であったかと思います。しかし、当時の人々も分かっていたのではないかと思います。講談で語られる内容全てが正しいわけではない。ただ、その真実と嘘のブレンドの妙に拍手喝采を送っていたのではないかと思うのですが、そう思うのは筆者だけでしょうか。

最後に全く関係ないように見えるデータを示して、この講座を終えたいと思います。

アメリカのマサチューセッツ工科大学の調べで、「ツイッター」では〇〇〇内容のニュースは◆◆◆◆内容のニュースよりも20倍速く、より広く拡散することが明らかになった。

さて、この伏せ文字には何が入ると思いますか？

〇〇〇には「誤った」、◆◆◆◆には「正しい」が入ります。

アメリカのマサチューセッツ工科大学の調べで、「ツイッター」では誤った内容のニュースは正しい内容のニュースよりも20倍速く、より広く拡散することが明らかになった。

さもありません、ですよ。事実に近い嘘は、間違いなく興味を惹きます。

学生の皆さんには、いわゆる「情報リテラシー」を鍛え、日常生活ではニュースの真偽を確かめる姿勢と言うものを持ち続けていただきたいと思いますが、演芸の世界では、真偽を超えたところも大いに楽しんでいただければと思います。

さて、まだまだお伝えしたいことは山ほどありますが、今日のところはお時間が来たようです。講師同様、「この続きは次回、お楽しみください」と申し上げて、この拙文も幕を下ろすのでございます。ご清聴ありがとうございました。（了）

笑いはスポーツ実施時に効果を及ぼすか？ —少年野球チームの指導者へのアンケート調査結果より—

追手門学院大学上方文化笑学センター所員 辰本 頼弘

[本稿は、2021年度に茨木市スポーツ少年団野球部会に所属する16チームの指導者にアンケート調査を実施した結果の一部である。監督、コーチをはじめチーム関係者77名（男性74名、女性3名）からの回答をもとに記載した。なお本稿のデータは追手門学院大学スポーツ研究センター紀要第7号（2022年3月）に掲載している]

調査項目（表）は、指導者が選手を指導しているときに見るポイントの10項目、また指導者の属性6項目、指導に関する考え24項目（各項目5件法で回答）についてアンケート調査を実施した。

アンケート調査結果より、特に指導しているときに見るポイントと指導に関する考え方には、

「声の大きさ」→「選手によって指導法を変えている」

「元気さ」→「練習では飽きさせない工夫をしている」

「笑顔」→「試合に勝つために練習をさせている」

「気遣い」→「様々なトレーニング方法を知っている」、「すべてを教えずに選手にできるだけ考えさせ、気づかせる」

「技術」→「チームの役割を選手に認識させている」、「スタッフの育成やコミュニケーションを大切にしている」

「根性」→「様々なトレーニングを知っている」

の6項目に有意な相関が見られた。

また指導者の属性と指導者が選手を指導しているときに見るポイントには「声の大きさ」、「笑顔」、「根性」、「目つき」、「積極性」の5項目に有意な相関が見られた。

これら有意な相関が見られた共通の項目は、「声の大きさ」「笑顔」「根性」となり、このワードから次のように考えられないだろうか。

- ① 練習中にハキハキしている。すなわち返事等を含め、指導者は声の大きさが大事としている傾向があり、この声の大きさは元気さにつながっている。また元気であるがゆえに表情も明るく笑顔が見られる。元気よく取り組むことは、失敗しても、へこたれずに取り組むことにつながり、チャレンジ精神が培われ根性が養われていくという相乗効果が生まれるのでは。
- ② 指導に関する考え方において、「試合に勝つために練習をさせている」の項目は「笑顔」と相関が見られることから、試合での勝利を目指すチームにとって練習中に表出する選手の笑顔（笑い）は勝利をつかむうえで重要な要素であると考えられる。試合に勝っている時や練習で上手くプレーが出来ている時は、自然に笑顔が出るが、負けそうな時やプレーにミスが続く時は、表情が固くなる場面が生まれる。常に笑顔の表出が出来るならば、気持ちだけでなく、筋肉の緊張も解けることで、普段の力の発揮に近づけることになるのでは。

今回の調査結果を受けて、筆者は各チームの指導者に、練習中に笑う場面を取り入れることを提案した。どれだけ笑えば良いのか、またどの場面で笑いを導入すれば良いのかは今後の検討課題であるが、緊張場面での笑いの導入

は、気分転換を図る習慣をつけられるとともに、ピンチの時にもリラックスしやすくなるという効果が期待されるのではないかと考えることから、笑いがメンタルトレーニングとして活用され、指導法のひとつとして有効ではないかと思考を巡らせている。

調査項目	
比較群	<p>「指導しているときに見るポイント」</p> <ul style="list-style-type: none"> ①声の大きさ ②従順さ ③元気さ ④笑顔 ⑤気遣い ⑥技術 ⑦気合い ⑧根性 ⑨目つき ⑩積極性
	<p>「指導者自身について」の属性</p> <ul style="list-style-type: none"> 1) 性別 2) 年齢 3) チームでの役割 4) 現チームでの指導経験年数 5) 携わっておられるスポーツの経験の有無 6) 携わっておられるスポーツの経験年数
検定変数	<p>「指導に関する考え」</p> <ul style="list-style-type: none"> 1) 規律・ルールをしっかりと守らせている 2) 選手の悪口を陰で言わない 3) 人間性の育成を目指している 4) 様々なトレーニング方法を知っている 5) 試合に勝つために練習をさせている 6) 練習では飽きさせない工夫をしている 7) 選手の分析ができる 8) 選手個人に対して先入観を持たないようにしている 9) 選手間でもめ事が起こらないようにコントロールしている 10) 選手に納得させる理論が説明できる 11) 試合中の指示が的確である 12) 対戦相手の分析をしっかり行うことができる 13) 選手とのコミュニケーションを大切にしている 14) 感情に流されず判断や決断をしている 15) 言葉づかいは丁寧になっている 16) 選手によって指導方法を変えている 17) 選手の要望を聞いて、ポジションを決めている 18) 客観的に物事をみることができる 19) アドバイスがシンプルでわかりやすい 20) すべてを教えず選手にできるだけ考えさせ、気づかせる 21) 試合の反省を明確にしている 22) 保護者との連携を適切に行っている 23) チームの役割を選手に認識させている 24) スタッフの育成やコミュニケーションを大切にしている

実演家講演会「講談の魅力」

追手門学院大学上方文化笑学センター長・文学部 広瀬 依子

2022年12月2日（金）、当センター主催の実演家講演会「講談の魅力」を開催した。この会は、国際教養学部国際日本学科の授業「演芸フィールドワーク」（担当教員＝広瀬）を学内公開するかたちをとった。履修生に加えて、より多くの本学関係者に当センターの活動を還元することを目指したためである。当日は教職員の方々にも何名かお越しいただき、講談について関心を持っていただけたのは嬉しいことであった。

「フィールドワーク」という名称通り、この授業は演芸にゆかりのある場所を学生たちが自ら訪問・調査し、その成果を2度にわたりプレゼンテーションするという流れである。1回目は上方落語『天王寺詣り』の舞台になった四天王寺（大阪市）を、2回目は演芸にゆかりのある場所を任意で選ぶという設定にした。

演芸の現場を訪れるのであるから、授業内では当然、落語・漫才など演芸についての解説を行う。映像も視聴する。しかし、やはり生の舞台にまさるものはない。学生たちに直接演芸を見聞きしてもらえれば、より多くの学びを得られるのではないか。

そこで、上方の講談師・旭堂小南陵（きょくどう・こなんりょう）師匠にご来演をお願いしたところ、快くご承諾いただいた。また、専門家の解説があれば説得力が深まると、当センターの大谷邦郎客員研究員（フリージャーナリスト・講談作家）にご出講を依頼し、やはりご快諾をいただいた。

講談は、演者がたった一人で物語を紡ぐ語り芸である。軍記物、漫遊記、一代記など、古典から新作まで幅広い作品が演じられる。上方では、豊臣秀吉の出世物語『太閤記』や、大坂の陣を描いた『難波戦記』などが代表的演目だ。史実では大坂の陣で散っていった真田幸村は、『難波戦記』では死なない。豊臣秀頼とともに落ち延びるのである。豊臣びいきの大坂の人びとの願望が込められた展開と言えるだろう。また、上方には神道講釈と呼ばれる作品群もあり、陰陽師・安倍晴明についての物語もある。演奏や音楽のない中、語りで想像力を刺激するのが特徴だ。

当日は、まず大谷客員研究員による解説から始まった。自身の執筆作品を例にとりながら、講談の特色や魅力についての内容である。詳細は本誌掲載の、大谷客員研究員による再録（1～4ページ）をご覧ください。講談の魅力・特色に加えて、面接等のキャリア形成と関連したお話も好評であった。

学生たちからの感想・意見等を下記に抜粋して紹介する。

- ◎講談は戦の話が多いため、第二次世界大戦後、GHQによって禁止されていたと知り、驚いた。
- ◎虚構とは、事実ではないことを事実のように流すことで、簡単に言うと「嘘」である。虚構記事は多くあり、例えば「肩こりの原因は幽霊である」というようなものもあると聞き、興味深かった。
- ◎大谷先生は記者を辞めてから講談作家になられたのかと思っていたが、事実を追いかけていく記者の仕事をしている最中に、講談作りに惹かれたというのに驚いた。
- ◎大谷先生が執筆された講談についてお聞きし、ところどころ現代の言葉がつかわれていたので、親近感がわいた。
- ◎誤ったニュースが正しいニュースより20倍も速く伝わるのは、恐らくそちらの方がインパクトが強いからではな

いだろうか。

◎講談の魅力として「独特のリズム・節廻し」「多くが事実に基づいている」「高い物語性」「高い娯楽性」があげられた。私が思っていた講談の魅力は、高いスピーク能力でお客さんを楽しませることだった。私が知らない講談の魅力を新しく4つも学べたことは、これからの自分につながると思った。

◎初めて生で講談を聞き、声量がすごいと思った。講談を聞いたら面接の時などに役立つとおっしゃった意味がなかった。

◎現在は漫画や小説の刊行で有名な講談社が、昔は講談を主に取り扱っていたとのことだった。名前を見れば明らかだが、これまで全く気付かなかったのが驚いた。

続いて、小南陵師匠が講談『あかぎれ膏薬』『姐己のお百（だっきのおひやく）』の二席を披露してくださった。『あかぎれ膏薬』は大谷客員研究員の執筆作品だ。江戸時代の陽明学者・中江藤樹が幼少期に奉公していた頃の話である。冬になるとあかぎれに苦しんでいた母のため、藤樹は膏薬を持って家に帰る。しかし母は、藤樹に里心がついてはいけないと、あえて突き放す。一見冷たいように見える母の行動だが、それは藤樹を思っていることだったのである。形はさまざまでも、親子の情愛は昔も今も変わらない。そんな情景や気持ちが描かれた物語である。

『あかぎれ膏薬』について、次のような感想が寄せられた。

◎母と息子の声が全然違ったので、ごちゃごちゃにならずに集中して聞いた。

◎母に冷たくされても受け止めて前を向く子どもの芯の強さに感動した。

◎中江藤樹が呆然として雪の中で座り込む場面や、木に積もった雪が溶ける様子など、細かな状況が想像でき、講師の語る力のすごさを感じた。

◎自分は一番後ろに座っていたのに、まるで目の前で話されているような声量で驚いた。

学生たちは初めて聞いた講談の物語に、しっかり入り込んでいることがわかる。

続いて『姐己のお百』。こちらも江戸時代の話である。実在したと言われる悪女に材をとった物語だ。多くの男性をだまし、時には命を奪いながら贅沢な暮らしを手に入れるという内容である。主人公のお百が行う冷酷な仕打ちに、思わず背筋が寒くなる。

この作品についても、学生はしっかり受け止めたことが見てとれる。

◎お百が男性を底なし沼に突き落とす時に、扇を叩く表現に迫力があり、びっくりした。

◎語り手（講師）と登場人物との語り分けがはっきりとわかった。小南陵先生は女性だったが、男性と女性の演じ分けがすばらしく、聴き入った。

◎手の動きや表情・顔の向き・声の強弱を変えながら、どんな人が話しているのかを表現されていた。また、座っているのにも関わらず、身体全体を使うようにして上半身を動かしていらした。荷物を背負っている様子も、その場には荷物が無いのにも関わらず重さを想像することができた。

◎プロの講師の舞台は初めてだった。授業前は、難しいのではないかと不安だったが、たまげた。話がスッと入ってきて想像もしやすかった。何よりも憑依されているような演技力に魅了された。小さな男の子からおじいさん、きれいな女性など、性別・年齢を問わず、幅がとても広がった。登場人物がどんな人で、今はどんな情景なのかまで鮮明に浮かんだ。

◎講談は古い言葉を使い、話も身近ではなく、理解しにくいというイメージがあった。しかし、実際に聴くと、それ

はまちがいとすぐにわかった。『姐己のお百』ではお酒に酔っている時の抑揚やテンションなども細かに再現されていて、今誰が話しているのかも鮮明に理解できた。この物語の時代にタイムスリップしたような感覚になった。

また、終了後に行ったインタビューでは、張扇を使用する意味や道具類についてもお話を伺うことができた。それらについての感想を抜粋して紹介する。

◎講談に使う枱台は、台によって音が違う、職人さんの手作りであること等をお聞きした。道具の説明をお聞きする機会はなかなかないので、多くのことを学ぶことができた。

◎張扇を叩く音には驚いたが、場面の切り替えにぴったりだと思った。

◎映像とは全然迫力が違う。

◎張扇を枱台に打つ音の効果で、物語の場面が変わる様子や展開がつかめた。講談の面白さを感じた。

また、学生たちの感想が多かったのが、語る・話すことについての発見である。次のとおり抜粋して紹介する。

◎重要な内容を話す時や、しっかり聞いてほしい部分の前では、話すスピードを変えたり、声色や声量を変えたり、わざと間をとったり、身振り手振りが大きくなっていったと感じた。変化を加えることによって注目を集めることにつながるのではないかと。授業でのプレゼンテーションの方法につながると思ったので、参考にしたい。

◎一人で長い問話をするのは難しいと思う。実際、自分も人前に立つと、言うことを忘れてしまうことがある。しかし、自分が伝えたいことの軸がぶれなければ大丈夫だというお話だった。これからは授業等で発表の機会があるはずだが、自分が伝えたいことを伝えようとする気持ちが大事だと感じた。

◎自分は実は講談にはあまり興味がなく、開始してからもうつむいていたが、声のトーンやテンポ等、全てが聞き取りやすかった。いつの間にか顔をあげて聴き入っていた。また、相手に何かを伝えるためには、自分がいかにして伝



講談を演じる旭堂小南陵さん

えたいかという気持ちが大事とおっしゃっていた。自分は人に何かを伝えるのが苦手だが、この講義をこれからの生活に活かしていきたい。

◎ゆっくりした話し方や早口など、場面ごとに、聴き手が登場人物の様子を連想できるように語られていた。また、右を見たり、左を見たり、遠くを見たりと、少しずつ視線を変えながら会場全体を見渡して全体に伝えることができるように配慮されていた。今回の講談を通じて真似できるところを真似して、自分のプレゼンテーションに活かしたい。

◎話す内容を覚える時に、一言一句覚えるのではなく、伝えたいことの軸を考えるというお話は、すぐに活かすことができると思った。自分でもやってみたい。

◎「上手い」は誉め言葉ではない、お客さんとコミュニケーションを取りながら演じていくことが大切という言葉が心に沁みた。

大学のゼミでは発表（プレゼンテーション）を行う機会が多い。実演を自らの発表に引き寄せて捉えたのは、私にとっては新しい発見であった。もちろん学生たちにとっては大きな学びになったのではないだろうか。

当センターでは今後もこのような機会を作るべく、2023年度も企画を考えているところである。

松原公民館講座「時代を切り拓いた女性たち～女性芸能者の歴史と歩み」

追手門学院大学上方文化笑学センター長・文学部 広瀬 依子

大阪府松原市の松原公民館から依頼をいただき、2022年10月から12月にかけて全4回の市民向け講座「時代を切り拓いた女性たち～女性芸能者の歴史と歩み」を担当させていただいた。大きな軸を女性芸能者にしたのは、公民館の企画に合致していたためである。松原市の公民館では毎年、男女共同参画のテーマでさまざまな講座を開催されているとのことで、その一環としてお声をかけていただいたというわけである。

過去に行われた講座には「生地から作る『簡単スパゲッティ&ピザ』」「はじめての心理学講座～自分の心の仕組みを知る」「美術館に行きたくなる～大人のための絵画鑑賞講座」「古事記・万葉集の時代の女性たち」「ニュースを読む時間」「名著の読み方～男女共同参画視点の『my本棚』」など、幅広い分野が並んでいる。広く市民に開放された講座ということが一目瞭然だ。

今回、メインタイトルを「時代を切り拓いた女性たち」にしたのは理由がある。芸能は、趣味・嗜好のものと捉えられがちだ。しかし、世界中のほとんどの地域で、ほとんどの民族で、歌や踊りが行われている。ということは、芸能は決して好きな人だけが好きな場所で行い、鑑賞しているのではない。人間の生活から生まれた、本能に近い行動なのだと考えられる。当然のことながら、芸能者は生活者でもある。従って、芸能および芸能者の誕生と発展は、社会状況と相互に関連し合っているのだ。そして女性芸能者の変遷をたどると、いくつかの時代を切り拓いてきたことが見てとれるのである。

受講して下さった方々は20名弱で、女性が約9割、男性が約1割であった。私よりも先輩の方々が多かったが、皆さん熱心にノートをとられ、こちらの話を一言も聞き漏らすまいという熱意が伝わってくる。また、終了後にはさまざまな感想や意見、質問を書いた用紙を提出して下さるのが毎回楽しみであった。

毎回の講座テーマと概要は次の通りである。

☆第1回・女性芸能者の歴史と展開

女性芸能者は古代・中世にかけて活躍した。巫女や、男装して舞う白拍子女（しらびょうしめ）等が、その例である。源義経の恋人・静御前も白拍子女だ。だが、近世になってプロの女性芸能者が江戸幕府から禁止され、公には活動できなくなる。女性芸能者の活動は縮小されていった。復活したのは明治維新後の近代である。女性芸能者が公許され、娘義太夫や筑前琵琶が台頭する。新しい時代が到来し、社会のシステムが変わった時代である。長い間陰に隠れていた女性芸能者たちが、少しずつ表舞台に出てくるのは必然であった。

☆第2回・花街（かがい）の女性による舞踊と音楽

芸妓・芸者・舞妓等を擁するまちを花街と呼ぶ。「芸」妓・「芸」者・「舞」妓という名称からもわかるように、花街の女性たちは芸や作法を修得しなければならない。お座敷での接待が全てではないのだ。芸妓・芸者・舞妓になるためには、花街が設けた研修所や学校へ通ったり、先輩や師匠から稽古をつけてもらうことが必須である。現在では「都をどり」「京をどり」のように、広く一般観客の前で行う公演も実施されている。そのきっかけは明治5年、国内初の博覧会が京都で開かれた際に、京都の花街・祇園甲部の芸舞妓たちが舞踊を披露したことにさかのぼる。京都も

花街も古いと思われがちだが、このように先駆的なことを行っていたのだ。

☆第3回・女優の誕生

江戸時代、プロの女性芸能者は幕府から禁止されていたが、「お狂言師」と呼ばれる人たちが舞台活動をしていた。大名屋敷の女性たちに向けて芝居を演じたり、舞踊の師匠として活動した人たちである。そして明治維新後、壮士芝居と呼ばれる新しい演劇が生まれた。自由民権運動に関わる青年たちが政治的な主張を芝居に込めたのである。そこで成功をおさめた川上音二郎は海外公演にも出かけ、明治32年、アメリカ公演時に妻の川上貞奴を舞台に立たせた。日本の女優第1号である。それから約10年を経て、別の女優も活躍し始める。研究所であり劇団でもある「文芸協会」の一員だった松井須磨子である。『ハムレット』『人形の家』などの翻訳劇でスターになり、日本の新劇女優第1号と言われる。須磨子が活躍し始めた時代は、婦人解放運動が始まったのと同時代である。平塚らいてうによる雑誌『青鞥』には須磨子出演の舞台も取り上げられた。女性が社会に進出する兆しが見えてきたのである。

☆第4回・少女歌劇からレビューへ

独身の女性だけで歌・ダンス・芝居を繰り広げる舞台芸能が、歌劇＝レビューである。大正初期に創設された宝塚歌劇団は、今も国内外でよく知られている。現在の阪急電鉄の前身・箕面有馬電気軌道の役員・小林一三の発案による、乗客誘致策が始まりだ。その一環であるテーマパーク「宝塚新温泉」のアトラクションとして、宝塚歌劇（当時は宝塚少女歌劇）が誕生したのである。可憐でありながら華麗な少女たちの芸は人気を得て、やがて関西一円だけではなく全国各地に少女歌劇が誕生。戦前には約30団体を数えた。やがて表現も洗練され、「少女」の表記がなくなった今も宝塚は根強い人気を集めている。大正末期に大阪で生まれたOSK日本歌劇団も、経営母体の変遷を経ながら今も活動を続けている。宝塚が第1回公演を行った大正3年は第一次世界大戦開戦の年である。日本はこの大戦に参加したが国内は戦地にならず、むしろ好景気に沸いた。人びとの生活も都市型へと変化し、新たな娯楽を求める風潮に少女歌劇はぴったりであった。

このように概略を見ただけでも、社会の変化と芸能の変遷には相関性があることがわかる。また、古代・中世に始まり大正期に至るまで、上方＝関西では多くの芸能文化が生まれ、根付き、発展してきたことも見えてくる。関西の地に拠点を置く大学のセンターとして、笑いに加えて文化全般も視野に入れた活動を今後も続けていきたい。

2022 年度上方文化笑学センター活動記録

2022 年

- 4 月 25 日 第 1 回所員会議 於：Webex（オンライン）
- 6 月 20 日 笑学カフェ①「就活どうですか？」於：zoom（オンライン）
- 6 月 22 日 笑学カフェ②「“見てはいけない”は“見たい”を促す」於：zoom（オンライン）
- 6 月 27 日 笑学カフェ③「競争と平等、どっちがいい？」於：zoom（オンライン）
- 6 月 29 日 笑学カフェ④「スポーツ上達の秘訣は笑い？」於：zoom（オンライン）
- 7 月 4 日 笑学カフェ⑤「AI はユーモアが分かるのか」於：zoom（オンライン）
- 7 月 6 日 笑学カフェ⑥「ジェネレーションギャップ」於：zoom（オンライン）
- 7 月 7 日 第 2 回所員会議 於：Webex（オンライン）
- 8 月 30 日 第 3 回所員会議 於：Webex（オンライン）
- 10 月 18 日 第 4 回所員会議 於：Webex（オンライン）
- 11 月 17 日 第 5 回所員会議 於：Webex（オンライン）
- 12 月 2 日 実演家講演会（講師：大谷邦郎氏、五代目旭堂小南陵氏） 於：総持寺キャンパス
- 12 月 26 日 第 6 回所員会議 於：Webex（オンライン）

2023 年

- 1 月 26 日 取材対応：浜松北高校放送部 於：Zoom（オンライン）
- 2 月 21 日 第 7 回所員会議 於：Webex（オンライン）
- 3 月 1 日 研究会（発表者：鳶野克己氏） 於：総持寺キャンパス
- 3 月 30 日 「上方文化笑学センター年報 第 3 号」発行

メディア掲載

- ・横田 修 社会学部舞台表現プロジェクト（通称 STEP）が子ども食堂をテーマに行った講演の取り組みに関する記事：「『子ども食堂』をテーマに追手門学院大学の学生たちが演劇を通して伝えたかったこと」City Life_vol.468 2022 年 11 月 30 日（水）掲載。
【Web 版記事 URL】<https://citylife-new.com/newspost/23501/>
- ・広瀬依子 初代国立劇場さよなら公演「文楽素浄瑠璃の会」プログラムに演目解説を寄稿

テレビ・ラジオ出演

- ・広瀬依子 NHK ラジオ第 1 『関西発ラジオ深夜便』0：30-0：40 頃
かんさい玉手箱～古典芸能情報コーナーに、関西の舞台芸能に詳しい専門家として出演
放送日：4 月 9 日（土）「上方芸能とは何か」／6 月 11 日（土）「歌舞伎」
8 月 13 日（土）「祭りの中の芸能」／10 月 15 日（土）「野外公演の魅力」
2 月 10 日（土）「女流義太夫」

2022年度上方文化笑学センター所員および研究員一覧

センター長	広瀬 依子	文学部 講師（上方芸能、伝統芸能）
所 員	浦 光博	追手門学院大学 教授（社会心理学、行動科学）
所 員	佐藤 貴之	文学部 講師（日本近現代文学）
所 員	辰本 頼弘	社会学部 教授（スポーツ科学）
所 員	横田 修	社会学部 准教授（演技・演劇教育論）
客員研究員	伊藤 洋子	上方文化笑学センター
客員研究員	大坂 幸司	追手門学院大学校友会 理事、元(株)日本旅行勤務
客員研究員	大谷 邦郎	グッドニュース情報発信塾 塾長、NPO 法人 DDAC（発達障害を持つ大人の会）監事、元・MBS ラジオ報道部長
客員研究員	木村 未来	文学部 非常勤講師、元・読売新聞文化芸術部記者
客員研究員	瀬沼 文彰	西武文理大学兼任講師、桜美林大学非常勤講師、日本笑い学会理事
客員研究員	高垣 伸博	文学部 非常勤講師、大阪府立上方演芸資料館・ワッハ上方「プロモーション委員会」事務局（プロデューサー）
客員研究員	鳶野 克己	立命館大学 特任教授、日本笑い学会会長
客員研究員	福山 侑希	奈良市子どもセンター、臨床心理士／公認心理師
特別顧問	坂井東洋男	追手門学院大学 名誉教授、元学長
特別顧問	西上 雅章	通天閣観光（株） 代表取締役会長、追手門学院大学 客員教授

追手門学院大学上方文化笑学センター規程

令和2年2月17日

制定

(設置)

第1条 追手門学院大学学則第58条に基づき、追手門学院大学（以下「本学」という。）に、上方文化笑学センター（以下「センター」という。）を設置する。

(目的)

第2条 センターは、本学の総合大学としての学問的蓄積を生かし、人類の誇りうる能力であり文化である笑いを対象にした、学問・文化の集積拠点となり、教育・研究活動の発展に寄与することを目的とする。

(事業)

第3条 センターは、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

- (1) 笑いを中心とした上方文化に関する情報発信
- (2) 笑いとユーモアを活用した教育プログラムの開発
- (3) 上方芸能及び笑いの文化に関する図書及び資料等の情報収集並びに提供に関する事。
- (4) 講座、講演会、シンポジウム等の開催
- (5) その他センターの運営に関する事。

(センター長)

第4条 センターに、センター長を置く。

- 2 センター長は、学長の推薦により常任理事会の議を経て学長が任命する。
- 3 センター長は、センターを代表し、センターの運営を統括する。
- 4 センター長の任期は、4月1日から2年間とし、年度の途中で任命された場合は、就任した年度の翌年度の4月1日から起算して2年を経過する日までを任期とする。ただし、再任を妨げない。

(所員)

第5条 センターに、所員を置くことができる。

- 2 所員は、大学の専任教職員の中から、第2条の目的を達成するために必要な専門性を有する者を所長が推薦し、学長が委嘱する。ただし、任期は2年とし、再任を妨げない。

(客員研究員)

第6条 センターに、客員研究員を置くことができる。

- 2 客員研究員は、学外の有識者の中から、第2条の目的を達成するために必要と判断される者をセンター長が推薦し、学長が委嘱する。ただし、任期は1年とし、再任を妨げない。

(特別顧問)

第7条 センターに、特別顧問を置くことができる。

- 2 特別顧問は、センター長の推薦により学長が任命する。
- 3 特別顧問は、センターの事業推進についてセンター長に助言等を与える。

(事務の所管)

第8条 この規程に関する事務は、研究企画課の所管とする。

(規程の改廃)

第9条 この規程の改廃は、大学教育研究評議会の議を経て学長が決定する。

附 則

- 1 この規程は、2020年4月1日から施行する。
- 2 追手門学院大学笑学研究所規程（2015年9月4日制定）は、2020年3月31日をもって廃止する。

附 則

この規程は、2020年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、2022年4月1日から施行する。

追手門学院大学上方文化笑学センター年報 第3号

2023年3月30日発行

発行者：追手門学院大学上方文化笑学センター
〒567-8502 大阪府茨木市西安威2丁目1番地15号
TEL：072-665-5024

印刷所：協和印刷株式会社
〒615-0052 京都市右京区西院清水町13
TEL：075-312-4010
